辺境の思考

桜美林大学リベラルアーツ学群教授　中生勝美（なかお　かつみ）

かつて、文化人類学はレヴィ＝ストロースの影響で、思想界だけでなく、人文科学、社会科学の領域で、絶大な影響力を持った。彼は哲学から人類学に専門を変えたが、その過程で、アマゾン川をさかのぼる大がかりな調査旅行に出て、その記録を『悲しき熱帯』に著した。この本には、哲学者が、未開地域でのフィールドワークを通じて人類学者に変貌するプロセスが描かれている。そのエッセンスは、「人間とは何かを考えるためには、遠くへ行かなければいけない」という言葉に集約されている。

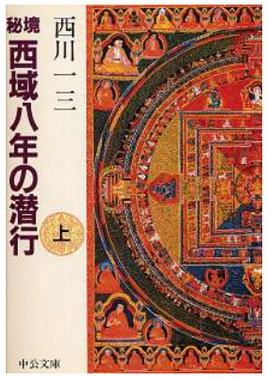
なぞらえるのはためらわれるが、私にも研究領域を変えた経験がある。若いころ、六法全書を片手に法律を学び、その合間に、世界の辺境を探検する記録を一服の清涼剤のように読んでいた。その後、縁あってアジアの辺境地を歩く研究者となった。人類学の調査はフィールドワーク中心と思われがちだが、私は、徹底して現地に関する文献資料をあさってから調査に行くようにしている。これは法学を学ぶ中で培った技術だ。

辺境の探検記、特にチベットやモンゴルに関する膨大な資料を集める中で、回想録を書いた人を訪ねて歩いたり、戦前に内陸アジアを調査した著名な研究者に話を聞いて回ったりした。その中で特に印象的なのは、西川一三（かずみ）氏である。彼は、戦前の中国・張家口（ちょうかこう）に開設された「興亜義塾」という特務の養成学校で、諜報員としての訓練を受けた。卒業後はチベットに潜入、徒歩でインドに向かい、ヒマラヤ山脈を越えて3回も往還し、戦後インドで英国官憲に拘束され日本に強制送還されたという経歴の持ち主である。帰国後、彼はGHQに召喚され、自身が得たチベットの地政学的な情報を提供することで、当時としては法外な報酬を得た。しかし、かつての敵国に協力したという自責の念にかられ、より詳細な記録を残そうと、必死になって『秘境西域八年の潜行』という回想録をまとめ、世に出した。

西川氏に会う前に、私は彼が歩いた足跡の一端を共有するため、中国の西部、青海省（せいかいしょうせいねい）西寧に向かった。彼は戦時中、西寧近郊にあるチベット仏教寺院タール寺でモンゴル僧に身をやつし、チベット語を学んでいたのである。私は帰国後すぐに、盛岡市で暮らす西川氏に会いに行き、回想録と照合しながら、当時の話をあらためて聞いた。西寧の写真を見せると、第一声は「家が増えたね」。そして、しげしげと寺の周りの風景を眺めていた。話の中で印象的だったのは、自分は軍ではなく外務省の特務員だと強調していたことだ。愛国主義思想を強く持った人物というよりも、冒険心の塊という印象を強く受けた。敗戦を知った後、どうしてすぐに帰国しなかったのか、と問うと、チベットの次に中東を目指したが、インドパキスタン戦争が始まり、国境が閉まったので諦めた、という。まるで無銭旅行をするバックパッカーと同じ感覚だった（最近、『深夜特急』の著者・沢木耕太郎氏が、西川氏から託されていた原稿をもとに新作を発表したと聞き、当時の私の印象は間違っていなかったと思い返した）。

GHQの前には、京都学派の人類学者、今西錦司らも西川氏を訪ねてきたそうだ。当時、彼らは中国チベット側からのヒマラヤ登山を目指していた。氏は、ネパール語など、現地のシェルパとコミュニケーションをとるために必要な言葉を教えたという。辺境踏破という目標が、情報機関の出身者と学知との交流を生んだのは自然なことだった。

西川氏を訪問しての別れ際、「世界を旅してきて、また旅に出たくなることはありませんか」と尋ねたら、「ここ（岩手県）は日本のチベットと揶揄される場所だからね」と切り返された。妙に納得した。



『秘境西域八年の潜行』西川一三
発行：中央公論社

青海省タール寺

略歴
1956年生まれ、中央大学法学部卒業、上智大学文学研究科博士後期単位取得退学、京都大学にて博士（人間・環境学）。専門分野は社会人類学、植民地研究。中国、香港、台湾、沖縄をフィールドに社会構造、歴史変化、植民地文化論について調査研究を進めている。

Essay 時の調べ